

シニアライフアドバイザー 西谷 裕子

新聞やテレビの「介護特集」で、必ずといって良いほど、認知症高齢者の介護に疲弊する家族の姿が描かれる。「大変だ」「あんなにはなりたくない」「認知症になったらどうしよう」

2025年団塊世代が後期高齢者になり高齢者人口はピーク（約3500万人）に、そのうち認知症老人が250万人、その10年後には445万人と厚労省は推計している。認知症になると徘徊が、昼夜逆転が、・・・周囲の人々を困らせ、施設に入るしかないのか？

私は、介護保険制度がスタートした平成12年から高齢者と関わる仕事に就き、ケアマネジャーも2年半勤めた。そこから得られる答えは「NO」である。認知症になった妻に寄り添いながら、穏やかな最期を迎えた夫婦を思い出す。

その妻は数年前より認知症症状が現れ、夫と隣家に住む娘とで介護され、私が初めて訪問した時は、すでに言葉もなく肝臓がんの末期状態だった。揺り椅子で庭を眺める妻の横で、夫は「今日はいい天気だね」と妻に声をかけ、私を見て「身体が元気な時は、ごみ箱におしっこをすることもあったんですよ。」と静かに話される。「そうですか。大変でしたね。」と私・・・認知症を受け入れ、穏やかに最期を迎えようとする二人のこれまでの物語に思いをはせながら会話を続けた。

認知症で苦しむ人の”思い”に目を向け、その人の生きている世界を理解し、その世界の中で本人が納得できるような関わりができること。この、人と人との相互関係の構築こそが、認知症になっても穏やかなゴールに到達する

事ができる必須条件ではなかろうか。

私も、そんなゴール目指して”今”を大切に、日々の生活の中で周囲の人々との関係を築いていきたい。

だって認知症になってからでは遅すぎるから・・・

